HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	米西戦争・フィリピン戦争における男らしさ
Author(s)	兼子, 歩
Citation	西洋史論集, 3, 50-75
Issue Date	2000-03-08
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/37432
Type	bulletin (article)
File Information	3_50-75.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

米西戦争・フィリピン戦争における男らしさ

兼子歩

はじめに——アメリカ帝国主義とジェンダーの歴史

一八九九年、当時ニューヨーク州知事であったセオドア・ローズヴェルトはシカゴの名士たちのクラブであるハミルトン・クラブにおいて、有名な演説「奮闘的生活」を披露した。前年に起きた、そして彼自身も義勇兵の中佐として参加した米西戦争の勝利を称え、これに付随してハワイ、プエルト・リコ、フィリピンの併合、および更なる帝国主義的政策を求める文脈において、彼は述べた。

もし男が仕事や正義の戦争を恐れ、女が母たることを恐れるならば、彼らは滅亡の際に立ちて恐れおののくであろう。そして彼らはこの地上から、消滅すべきである。彼らは、この地上では、力強く勇敢で高潔なる男女のあざけりの対象にこそふさわしいのである。これは個人についてのことであるように、国民についてのことでもある。(1)

ローズヴェルトのこの言明は、彼においては個人にとって重要なことは男女がそれぞれその役割を果たすべきこと、そしてこの役割がネイションと密接な関連性を有している、ということを示している。彼が女性のふるまいのあるべき規範という問題を重要視していたことは、彼が後に「人種の自殺」という言葉を用いて女性のセクシュアリティのあり方を熱心に論じたことからも明らかである。(2)

しかし、ローズヴェルトにとって女性のセクシュアリティと同様に重大な問題は、男性の問題であった。彼はアメリカの帝国主義的活動に批判的な勢力に対してその男らしさを疑うように激しい非難の言葉を浴びせた。

臆病な男、怠惰な男、自分の国を信じない男、過度に文明化され、偉大なる戦闘的で堂々たる美徳を喪失した男、無知な男、そして、「脳の中に帝国を持つ峻厳なる男たち」を奮い立たせるような力強い高まりを感じることの出来ない魂しか持たぬ鈍重な精神の男〔…〕

彼が求める男性像とは、日々の労働をこなしていく以上の崇高な責務を果たそうと奮闘するような男であり、その責務とは「ネイションへの責務であり、そして人種に対する責務」であった。[3]

従って、しばしば引用されるローズヴェルトの著名な演説においては、ジェンダーが極めて重大な意味を持ち、これと人種・ナショナリズムおよび帝国主義というテーマがそれぞれ密接な連関をもって語られている。故に、世紀転換期アメリカにおける帝国主義――まぎれもなく、ローズヴェルトは最も代表的な帝国主義の唱導者の一人であった――を論じるに際しては、ジェンダーの問題を考察することは極めて有益であると言える。[4]

しかも、特に「男らしさ」をめぐる議論こそが、ジェンダー化された言説の中でも重要性を持ってくる。そこで、ジェンダーを論じるに際しては、女性と同時に男性の意味を歴史的に考察することが求められるのである。

註

（1）Theodore Roosevelt, "The Strenuous Life," Apr. 10, 1899, in his *The Strenuous Life: Essays and Addresses* (New York, 1899, 1906), p.6.

（2）Linda Gordon, *Woman's Body, Woman's Right: A Social History of Birth Control in America* (Harmondsworth, 1974, 1977), chap.7, esp. pp.136-142; Thomas G. Dyer, *Theodore Roosevelt and the Idea of Race* (Baton Rouge, 1980), chap.7.

（3）Roosevelt, "The Strenuous Life," pp.9-10.

（4）ローズヴェルトの革新主義的改革政治と「男らしさ」の関係の重要性を論じたものとして、以下を参照。Arnaldo Testi, "The Gender of Reform Politics: Theodore Roosevelt and the Culture of Masculinity," *The Journal of American History*, vol.81 (Mar. 1995).

一　男性史の意義とその展開

ある意味では、かつての歴史学はほとんどが男性の歴史であるといっても過言ではない。「歴史家たち（ほとんどが男である）は、（選ばれた）男たちの公的なふるまいと探求とを詳細に考察してきた」のである。[1]これに対して、女性史家たちは、歴史における女性の存在を発掘し分析してきた。それは男性の経験をもって人間一般の経験であるとする従来の歴史学への批判でもあった。

女性史研究の進展は、社会的・歴史的に構築された性差の概念であるジェンダーへの注目につながるものであった。ジェンダー関係の研究は、「かつて女性は存在せず、ジェンダーがないと仮定されていた場が、男性同様に女性も存在していたというだけでなく、ジェンダー関係についての仮定、理念、ヴィジョンに浸透されていた」ことを明らかにした。これによって、これまでジェンダーに関係ないと思われていた分野も、ジェンダー関係の形成と争いの場であったことが指摘されるようになったのである。[2]

ここにおいて、男性史が歴史的経験の様々な場におけるジェンダー関係の構築過程を考察する際の重要な要素として登場するのである。そもそも、ジェンダー関係とその形成および闘争が議論の対象となる前提には、これまで「人間」の行為や思想と考えられていたものが、実際には男女関係およびその仮定や理想と密接な関連性を有していた、ということの発見がある。故に女性のみでなく男性にも光を当てる必要性がある。また、性差が社会的・歴史的に構築されたものであ

るならば、「男らしさ」も同様である。「女性の役割のいかなる修正も、『女性の問題』に対応して、必然的にまた男性の役割を変化させる」のである。[3] 特に一九八〇年代以降、男性の意味と経験を歴史的に分析した研究書が数多く出版された。こうした研究は、歴史における「男性であること」「男らしさ」の意味についての理解を深めた。[4]

しかしながら、これらの男性史の成果にも問題がある。最大の問題は、多くのジェンダーとしての「男性」の歴史的経験の記述が、他の要素――階級や人種、ナショナリズムなど――を十分考慮してこなかったという点にあると思われる。この問題は、多くの男性史研究が主に白人中産階級男性を対象として、しかし彼らの人種・階級性を十分考慮に入れることなく単に「男性」として扱っていることで更に深刻化している。こうした傾向は、「男性であること」や「男らしさ」の意味や定義の構築や変容における権力の働きを見ず、なぜそのような「男らしさ」が構築されたのかについて触れない、という問題を産む。これによって、階級や人種、その他の力関係の働きは見えなくなってしまう。[5]

しかし、ジェンダーが「両性間に認知された差異にもとづく社会関係の構成要素であり」同時に「権力の関係を表す第一義的な方法」[6]である以上、男らしさ（と女らしさ）もまた様々な集団間の権力関係の中で構築され、争われるものである。事実、近年の女性史はジェンダーと人種や階級などの要素の間の関係の重要性を盛んに指摘しているのである。[7]

近年、人種や階級、ナショナリズムなどにおける権力関係の文脈から「男らしさ」の構築と変容を分析する研究が登場してきている。たとえば、ヨーロッパ史家ジョージ・モッセは、中産階級の自己表象とナショナリズムおよびジェンダーの密接な連関を指摘している。[8] こうした点をアメリカ史において意識的に論じたものとして、ゲイル・ビダーマンによる一九九五年の著作『男らしさと文明』が挙げられる。[9] 同書によれば、白人中産階級の男らしさは、法人資本主義化という経済構造変化によって自己抑制と自己否定というヴィクトリア的価値観が魅力を失ってきたこと、そして一九世紀後半の労働者階級の運動が中産階級の男らしさへの挑戦と認識された、という文脈において再編成された。男女双方のジェンダーは「歴史的でかつイデオロギー的なプロセス」であり、これを通じて個人は男ないし女として位置づけられ、また自己を位置づける。そして、それによって男性は自己のアイデンティティや権力、権威を主張する。[10]

この過程においては（白人中産階級の）男性によって様々な戦略が選択される。たとえば女性的なるものの否定を通じた男性性の称揚であり、あるいは労働者階級の（中産階級から見た）粗野な男らしさの文化の奪用であった。しかし最も重要な戦略は、「人種」をめぐる言説であった、という。ビダーマンによれば、

> 中産階級が「男性性」を作り替えようとするときに、多くの者はジェンダーから、関連したカテゴリー、つまりジェンダー同様に身体・アイデンティティ・権力を結び付けるようなカテゴリーに目を転じた。そのカテゴリーこそが人種である。様々な方法で、ジェンダーを再

編成しようとするアメリカ人たちは、その理念を男性の権力と白人の至上性の結びつきを描くことによって説明したのである。(11)

従って、男らしさの歴史的な構築過程を探求するに際しては、対象が白人中産階級に限定されていても、その過程において他のカテゴリーとの連関を考察する必要性があるのである。

本論では、こうしたジェンダーを通じた戦略を、冒頭に紹介したように米西戦争およびフィリピン戦争という、世紀転換期アメリカの帝国主義との関連において論じる。この帝国主義戦争という大きな事件には、ジェンダーと人種・階級・ナショナリズムの相互連関性が重要な役割をしており、またこの戦争がジェンダー関係の再編に影響を与えているからである。

註

（1）Elizabeth H. Pleck and Joseph H. Pleck, "Introduction," in Pleck and Pleck (ed.), *The American Man* (Englewood Cliffs, 1980), p.1.

（2）Linda K. Kerber, "Gender," in Anthony Molho and Gordon S. Wood (ed.), *Imaging Histories: American Historians Interpret the Past* (Princeton, 1998), p.46, 49.

（3）Peter G. Filene, *Him/Her/Self: Sex Roles in Modern America*, second edition (Baltimore, 1986), p.69. ヨーロッパ史についての同様の言明は、Natalie Z. Davis, "Women's History in Transition: The European Case," in *Feminist Studies*, vol.3 (1976), esp. p.90.

（4）代表的なものとしては、Joe L. Dubbert, *A Man's Place: Masculinity in Transition* (Englewood Cliffs, 1979); Pleck and Pleck, *The American Man*; David G. Pugh, *Sons of Liberty: The Masculine Mind in Nineteenth-Century America* (Westport, 1983); Filene, *Him/Her/Self*; J. A. Mangan and James Walvin (ed.), *Manliness and morality: Middle-class masculinity in Britain and America, 1800-1940* (Manchester, 1987); Mark C. Carnes and Clyde Griffen (ed.), *Meanings for Manhood: Constructions of Masculinity in Victorian America* (Chicago, 1990); E. Anthony Rotundo, *American Manhood: Transformations in Masculinity from the Revolution to the Modern Era* (New York, 1993); Michael Kimmel, *Manhood in America: A Cultural History* (New York, 1996)など。

（5）この点については、以下に簡単に触れられている。"Introduction," in Carnes and Griffin, *Meanings for Manhood*, p.2.

（6）ジョーン・W・スコット『ジェンダーと歴史学』、荻野美穂訳、平凡社、一九九二年（原著は一九八八年）、七五頁。

（7）Kerber, "Gender," pp.47-48; Jacqueline Jones, "Race and Gender in Modern America," in *Reviews in American History*, vol.26 (Mar. 1998); Vicki L. Ruiz and Ellen Carol Dubois (ed.), *Unequal Sisters: A Multicultural Reader in U.S. Women's History* (New York, 1994)（『差異に生きる姉妹たち――アメリカ女性史における人種・階級・ジェンダー』和泉邦子ほか訳、世織書房、一九九七年）を参照。

（8）ジョージ・L・モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ――市民道徳とナチズム』佐藤卓巳・佐藤八寿子訳、柏書房、一九九六年（原著は一九八八年）。George L. Mosse, *The Image of Man: The Creation of Modern Masculinity* (Oxford, 1996). また、以下も参照。Joane Nagel, "Masculinity and nationalism: gender and sexuality in the making of nations," in *Ethnic and Racial Studies*, vol. 21 (Mar. 1998).

（9）Gail Bederman, *Manliness and Civilization: A Cultural History of Gender and Race in the United States, 1880-1917* (Chicago, 1995).

（10）Ibid., p.7.

（11）Ibid., pp.16-23. 引用は p.20. より。

二　男らしさの新しい言説

（一）世紀転換期の「熱情的な男らしさ」

世紀転換期のアメリカ合衆国における文化的変容は、政治・経済等の変容と共に、従来から様々な形で指摘されてきた。たとえば、ジョン・ハイアムは一八九〇年代のアメリカ文化の変容を「都市・産業文化」の退屈さを突破する要求という観点から論じ、T・J・ジャクソン・リアズは、世紀転換期のアメリカ・ブルジョワ文化を社会の合理化と物質的快適さに抵抗するアンチモダニズムの時代であると規定している。[1] 共に当時の文化を男性的な要素の濃いものとして論じている（ハイアムによれば「女性が男らしくなり、男性はより戦闘的になった」[2]）が、一九世紀の文化変容を明確に「男らしさ」というジェンダー的観点から論じたのが、一九世紀を中心に一八世紀末から二〇世紀までの中産階級の「男らしさ」とその変容を論じたE・アンソニー・ロータンドの『アメリカの男らしさ』[3]である。

同書は、一九世紀末に男らしさをめぐる言説の大きな変容を指摘し、この新しい男らしさの言説を「熱情的な男らしさ」[4]と命名している。もともと、一九世紀を通じ、男性を特徴づけるものは「熱情」であり「熱情を持たない」女性とは対照的な存在である、として男女を区分する言説は存在していた。[5] 従って「熱情」の存在をもって男らしさの構成要素であるとする言説それ自体は、一九世紀末になって新たに登場したものではない。新たに現れた言説の特徴は、その「熱情」の評価にある。

この「熱情的な男らしさ」の特質は、「熱情」に積極的な価値を見出し、これを男らしさの基準と連関させるところにある。ロータンドによれば、「熱情的な男らしさ」の言説には主に三つの特徴が見出される。

一つは、男性の肉体への関心の増大である。所謂ヴィクトリア的文化と称される一九世紀中盤までの中産階級の価値観における男らしさの基準は、身体的なものよりも人格（キャラクター）の陶冶にあった。それは男性の中に本質的に存在するとされた「熱情」すなわち各種の欲望をコントロールする道徳的な能力を意味していた。また、身体に関心が寄せられる場合にも、それは主に禁酒や禁欲というような、自己の欲望の抑制と密接な関連を有する側面についてであった。[6]

しかし、特に一八八〇年代から九〇年代にかけて興隆した「熱情的な男らしさ」の言説は、男性の身体への関心の増大をその特徴としていた。肉体の鍛練が重視され、スポーツが盛んに行われるようになった。たとえばプライズ・ファイト（ボクシング）は、従来中産階級においては野蛮なものとされていたスポーツであったが、紳士の自己鍛練を目的とした「スパーリング」と姿を変えることで、大いに隆盛を見た。その延長上には、暴力を伴う戦いや争いをそれ自体で価値あるものとする言説の流布もあったのである。[7]

第二の特徴は、「熱情」を原始的な男らしさとして賛美するという方向性である。一九世紀末には中産階級の男性の間で、自己を「原始人」と比較することが流行し、時に「原始人」の男らしさから学ぶべ

し、とする主張も展開された。更には、男性を動物と同一視し、男の中にある本能的衝動を称揚する言説が盛んに生産され、動物のメタファーで男の「熱情」を語ることも盛んになった。あるいは、中産階級向けの育児書においても、少年の「熱情」を抑制するよりも、これを積極的に建設的な活動に昇華させるように説くものが一九世紀後半以降多く現れるようになった。たとえば当時の著名な心理学者G・スタンレー・ホールなどは、少年の野蛮な「熱情」を保存することで、少年が成人した後の「過度の文明化」の弊害を回避することができると論じた。かくして一九世紀末には、男性の「熱情」は少なくとも理性と共に重要である、とされるようになったのである。[8]

そして「熱情的な男らしさ」を特徴づける第三の特徴が、軍事的なヒロイズムの男らしさにとっての重要性であった。しかし、米西戦争・フィリピン戦争期において流布する軍事的精神の称揚と、これに関連した軍隊的な社会モデル賛美の傾向は、一九世紀の中産階級が従来規範としてきた男らしさの価値観と鋭く対立することになる。そしてそこには、階級の問題が深く関係していたのである。

(二) 熱情、軍事的ヒロイズム、階級

特に米西戦争・フィリピン戦争を中心とした世紀転換期のアメリカにおいて流布した軍事的な男らしさの称揚は、実際には矛盾を内包したものであった。それは、軍事的理念が個人主義的なヒロイズムとヒエラルキー化された組織の中の歯車の如き一員としての意味という、必ずしもスムーズに接合され得ない要素を持っていることに由来していた。

世紀転換期において、軍事的なヒロイズムは、一方では個人主義的な観点から認識されていた。一九世紀末、特に米西戦争直前の一八九〇年代において流行した小説には、明白に個人主義的な騎士道精神的ヒロイズムが投影されていた。野蛮な反乱者たちを鎮圧し、ヒロインを救出する勇敢な騎士のロマンスは、アメリカの従属的地域への軍事介入を暗示する帝国主義的な舞台の上で、自立した雄々しきヒーローとしての主人公の活躍を描いたのである。[9]

他方で、軍事的ヒロイズムを発揮する場となるべき戦場ないし軍隊そのものが、個人主義的なヒロイズムとは対立する場でもあった。「兵士の信念」と題された著名な演説において、かつて南北戦争に従軍した経験を持つオリヴァー・W・ホームズ判事は以下のように述べた。

> 盲目的に受容された責務への服従において、ほとんど理解しない大義において、何ら見解を持たない軍事行動の計画において、そして全く用いられ方を知ることのない戦術下において、兵士にその命を投げ出させるような信念は、真実であり崇敬に値するものである。

あるいは、米西戦争の戦闘終結直後に陸軍長官に就任したエリヒュー・ルートは、アメリカ兵を称揚する目的の演説でこう述べた。「今日アメリカの兵士は、我々が軍事機構と呼ぶ偉大なる機械の一つのパーツである。それは、コンバーターによるように、政府の政策が

将軍の戦略に、戦場での戦術に、銃の後ろにいる者の行動に変換される機械である」。兵士が軍事組織の一部品であって、自立し独立したヒーローたりえないことは、海軍において更に顕著だった。彼らが乗り込む近代的戦艦はメタファーでなく機械そのものである。『アトランティック・マンスリー』誌によれば、水兵ですら戦艦に乗り込むと「見知らぬ国にいる自分を見出す。クルーはおそらく分散され、小さな区画に隠されている。巨大な重金属の塊の後ろからやってきた訪問者を、幾つかの恐るべき砲が見ている。総じて、彼を沈鬱で確信のない状態にする明白に非友好的な空気が存在している」。それは、あたかも森に迷い込んだ少年の如き気分である、という。[10] こうした言説に、独立した個人主義的ヒロイズムを見出すことは困難である。

このような言説は、従来中産階級のみならず労働者階級にも共有されていた理念である、いわゆる共和主義イデオロギーと対立することになる。共和主義においては、他者に従属せず、政治的にも経済的にも独立した個人主義的な市民であることが公共善にとって極めて重要であるとされていた。独立していることで初めて公共の利益について自由に考え、共和国に貢献できる、とされていたためである。他方労働者階級は、こうした言説を奪用し、労働者側の要求を労働者が独立した市民になるための方策として正当化させようとしてきた。[11] 更に付言すれば、共和主義における独立した市民のモデルは家父長的に自立した男性であり、ジェンダーと密接な関連を有していたので、共和主義的な「独立」の理念は男らしさのアイデンティティにも重大な意味を持っていた。[12] 故に軍事的な男らしさの理想が自立した個人主義的ヒロイズムと緊張関係にあることは深刻であった。

実際、軍事的ヒロイズムと結合した「熱情的な男らしさ」の批判者の中には、このように兵士の自立性・独立性を奪い取る軍隊の精神を問題にする者もいた。作家・弁護士で平和運動家のアーネスト・ハワード・クロスビーは、皮肉を込めて述べていた。

> 我々が新しい男らしさを享受する前に、抹殺しなければならないもう一つの誤った概念がある。それは、〔独立〕宣言が近年において踏みにじられる以前には流布していた、古くからの自由と独立の信念である。絶対的服従、命令にいつでも従い何でもするという姿勢、これらが必要とされる軍事的性質である。[13]

故に軍事的な価値が正当性を認められるためには、個人としての独立性という、男らしさの定義と深く結びつけられた問題を解決する必要があった。

ここに、「熱情的な男らしさ」が重要な意味をもつことになった。「熱情的な男らしさ」は、男性の本質として動物的で原始的とされる「熱情」を重視し、これを発揮することをもって男らしいとする言説である。「熱情的な男らしさ」は、その「熱情」が軍隊ないし戦場において発揮できる、と主張することで、軍隊のヒエラルキー的組織における自立性の喪失を補填ないし正当化せんとする言説として展開されたのである。

実際の米西戦争における戦闘では、米軍が依然として黒色火薬を使

用していたのに対しスペイン兵は無煙火薬を用いていた。そのため、敵と遭遇し、ヒロイックに戦うことを夢見て志願したアメリカ兵たちは、一方的に狙い撃ちされ、決してヒロイックな戦闘を享受できなかった。その上、補給や衛生管理の不備から、アメリカ軍は米西戦争において戦闘よりも病気による死者がはるかに多いほどであった。[14] つまり、騎士道的でヒロイックな戦争体験ではなかったのであるが、戦争を回顧する記憶は、戦争への参加が「熱情」の発露であったことを強調したのである。それは、戦闘の参加者が自分の男らしさを他に対して示すためでもあった。

イリノイ第六義勇歩兵連隊に志願して戦闘に参加した詩人カール・サンドバーグは回顧録の中でこう記している。志願した男たちを動機づけたものは、「冒険への愛、あるいは危険に直面して困難に耐えることへの好奇心は、その一つであった。そして、私が判断するに、それは際立った動機であった。[15]」米西戦争においては、セオドア・ローズヴェルト率いる合衆国第一義勇騎兵隊、通称ラフ・ライダーズ（荒馬乗りの意）の参戦と活躍が有名であるが、戦争の体験を綴った著書『ラフ・ライダーズ』[16]の記述にも同様の動機が見出せる。ラフ・ライダーズへの参加者たちは皆、「共通して豪胆さという特性と冒険への渇望とを有していた。彼らは、言葉の古い意味において、一人残らず冒険者として生まれてきた男だったのである。[17]」

米西戦争を報道するため派遣されたジャーナリストたちの記録も、こうした言説を裏書きした。戦争特派員ハルステッドは以下のように述べている。

ローズヴェルト中佐は「しり込みする男はいなかった」と述べた。そして、スペイン人の捕虜が言うように、「彼らの戦い方は、他の兵士とは違っていた。我々が一斉射撃を行うと、引くのではなくむしろ前進してきた。我々が撃てば撃つほど、彼らは我々に接近してきた。」

また、著名な戦争特派員リチャード・H・デイヴィスは、同様にラフ・ライダーズに関するスペイン兵の言葉を引いて述べている。「彼らは、我々を手で捕まえようとした。[18]」

加えて、戦争が「熱情」を発揮する場であるが故に、そこには階級を超えた男たちの平等に基づいた連隊が存在する、という言説が同時に展開された。一九〇一年にローズヴェルトは南北戦争の退役軍人の集会で演説した。南北戦争においては「商人と事務員、製造業者と職工、農民と雇われ人、資本家と賃金労働者、都市民と田舎住まいの人、東部人と西部人は共に軍隊に入り、一緒に苦難と危険と困難とに直面し、同じ要塞で死に、勝利が到来した時には同じ無私の勝利の興奮を感じ取ったのである。」そして、南北戦争ほどではないにせよ、スペインとの戦いによっても「少なからぬ善がなされたのである。[19]」フィラデルフィアの新聞の論説も同様の主張を行った。「共にマラリアが蔓延する大地の上に眠り、同じ国のために並んで戦火と死とに直面した後に、平等な権利と機会の地において誰が貧者を富者に、富者を貧者に対抗させるよう展開させるであろうか。[20]」

このように軍事的なヒロイズムによる「熱情的な男らしさ」が称揚された背景には、しばしば指摘されるように、巨大企業の出現とアメリカ資本主義の法人化[21]の傾向によって、自己抑制による人格陶冶を通じた経済的独立への道が困難さを増し、中産階級男性の男らしさ達成の手段として魅力を失った、という点が挙げられるだろう。[22]

こうした中で、世紀転換期には軍隊のヒエラルキー的組織を称賛する動きが強まっていった。男性同士の関係の理想を軍隊に見出す言説が多く生産され、その中で、ヒエラルキー化され管理された社会のモデルを軍隊に見出す傾向が発生した。巨大企業の組織構造は、そのヒエラルキー性ゆえに軍隊組織との親和性が高く、そもそも企業自体が軍隊の組織を模倣する部分もあった。[23]

たとえば、一九一五年の『イェール・レヴュー』に掲載された論文は、アメリカの若い男たちに軍事訓練を施すことで規律を教えることができる、と主張した。「アメリカ人は優越した状況においては最も優れている――つまり彼がその能力を組織化、計画、そして指揮を執る時である」が、「数百万のアメリカ人は少なくとも暫定的には、従属的地位に就かねばならない。多かれ少なかれ苦役をこなし、そして服従しなければならない。」そのような理由から、最近では企業や公共機関において元兵士や士官学校出身者への需要が高まっている、とこの論文は指摘している。[24]ここにおいては、男は指導する者とされる者に分類され、独立した市民の平等な社会関係という共和主義的理想は存在しない。同様に、哲学者ウィリアム・ジェイムズは、「戦争の道徳的代替物」と題された著名な講演で、戦争自体は恐るべきものであるが、「近代人はその祖先のあらゆる生得的好戦性と栄光への愛を引き継いでいる」と、好戦性を自然なものであると定義し、それ自体は価値のあるものであると主張する。ジェイムズは論じる。

> 我々は、新しいエネルギーと頑健さが、軍事的精神が忠実に固執する男らしさを継続するようにしなければならない。軍事的美徳は、持続的な結合の絆たらねばならない。つまり、勇猛さ、軟弱さへの軽蔑心、私的な利害の放棄、命令への服従、これらは国家が建てられる礎石たらねばならないのである。[25]

世紀転換期の「熱情的な男らしさ」は、（特に経済的な）自立性を達成できなくとも「熱情」を発揮できればそれによって男らしさを証明できるので、男らしさを喪失せずに企業の中のヒエラルキー構造を受容できる言説であった。実際ローズヴェルトが説いた「奮闘的生活」は、「もし男が仕事や正義の戦争を恐れ、女が母たることを恐れるならば」彼らは消滅すべきであると主張したが、仕事は経済的独立とは必ずしも結びついていないのである。[26]

しかし、重要なことは、「熱情的な男らしさ」が強調され、男らしさの規範から独立性や自立性の理念が切り離されたとしても、個人の独立や自立性の価値が認められなくなったわけではない、ということである。むしろ、「熱情的な男らしさ」によって独立性や自立性から切り離された形の男らしさが称揚されるほど、独立性を有していることは重要であった。先述の『イェール・レヴュー』が示すように、ア

メリカの男性が指導する側とされる側に分けられるとすれば、指導者の正当性は個人主義的なヒロイズムによって表される。そして、こうした言説は、人種との連関において正当化が図られていくのである。

註

（1）John Higham, "The Reorientation of American Culture in the 1890's," in John Weiss (ed.), *The Origins of Modern Consciousness* (Detroit, 1965)。引用はp.27.より。T. J. Jackson Lears, *No Place of Grace: Antimodernism and the Transformation of American Culture, 1880-1920* (New York, 1981).

（2）Higham, "The Reorientation," p.31.

（3）Rotundo, *American Manhood.*

（4）Ibid., chap.10. 原語はpassionate manhood.

（5）Nancy F. Cott, "Passionlessness: An Interpretation of Victorian Sexual Ideology, 1790-1850," in *Signs*, vol. 4 (Winter, 1978).

（6）Daniel Walker Howe, "Victorian Culture in America," in Howe (ed.), *Victorian America* (Philadelphia, 1976), pp.11-12, 17-20; David B. Danbom, *"The World of Hope": Progressives and the Struggle for an Ethical Public Life* (Philadelphia, 1987), pp.5-9; Warren I. Susman, "'Personality' and the Making of Twentieth-Century America," in Susman, *Culture as History: The Transformation of American Society in the Twentieth Century* (New York, 1984), pp.273-274.

（7）Rotundo, *American Manhood*, pp.222-227; Elliott J. Gorn, *The Manly Art: Bare-Knuckle Prize Fighting in America* (Ithaca, 1986), chap.6, esp. pp.186-188; John Higham, "The Reorientation"; Kimmel, *Manhood in America*, pp.135-141.

（8）Rotundo, *American Manhood*, pp.227-232; E. Anthony Rotundo, "Body and Soul: Changing Ideals of American Middle-Class Manhood, 1770-1920," in *Journal of Social History*, vol. 16 (Summer, 1983), pp.26-29, 32; E. Anthony Rotundo, "Learning about manhood: gender ideas and the middle-class family in nineteenth-century America," in Mangan and Walvin, *Manliness and morality*, pp.40-43, 46-48; Peter N. Sterns, "Men, boys, and anger in American society, 1860-1940," in ibid. ホールの児童心理学とジェンダーの関係については、Bederman, *Manliness and Morality*, chap.3.

（9）Amy Kaplan, "Romancing the Empire: The Embodiment of American Masculinity in the Popular Historical Novel of the 1890s," in *American Literary History*, vol. 2 (Winter, 1990); Lears, *No Place of Grace*, chap.3.

（10）Oliver Wendell Holmes, Jr., "The Soldier's Faith," May 30, 1895, in Holmes, *The Occasional Speeches of Justice Oliver Wendell Holmes*, compiled by Mark DeWolfe Howe (Cambridge, Mass., 1962), p.76; Elihu Root, "The American Soldier," Oct. 7, 1899, in Root, *The Military and Colonial Policy of the United States*, (ed.) Robert Bacon and James Brown Scott (Cambridge, Mass., 1916, reprinted in 1970), p.3; Ira Nelson Hollis, "The Uncertain Factors in Naval Conflicts," in *The Atlantic Monthly*, vol. 81 (Jun., 1898), p.728.

（11）共和主義思想そのものについては、Gordon S. Wood, *The Creation of the American Republic, 1775-1783* (Chapel Hill, 1969)を参照。共和主義イデオロギーが兼用されていった点については、以下を参照。Joyce Appleby and others, "Special Issue: Republicanism in the History and Historiography of the United States," in *American Quarterly*, vol. 37 (Fall, 1985); Nick Salvatore, *Eugene V. Debs: Citizen and Socialist* (Urbana, 1982); Leon Fink, *Workingmen's Democracy: The Knights of Labor and American Politics* (Urbana, 1983); 森脇由美子「アメリカにおける職人の『伝統』と共和主義――建国期から一九世紀中葉まで」『西洋史学』第一八五号（一九九七年）。また研究史として、Daniel T. Rodgers, "Republicanism: the Career of a Concept," in *The Journal of American History*, vol. 79 (Jun. 1992)も参照。

（12）Linda K. Kerber, *Women of the Republic: Intellect and Ideology in Revolutionary America* (Chapel Hill, 1980); Ruth H. Bloch, "The Gendered Meanings of Virtue in Revolutionary America," in *Signs*, vol. 13 (Autumn, 1987).

（13）Ernest Howard Crosby, "The Military Idea of Manliness," in *The Independent*, vol. 53 (1901), cited in Rotundo, *American Manhood*, p.237.

(14) Gerald F. Linderman, *The Mirror of War: American Society and the Spanish-American War* (Ann Arbor, 1974), chap.4.
(15) Carl Sandburg, *Always the Young Strangers* (New York, 1952), p.409.
(16) Theodore Roosevelt, *The Rough Riders and the Men of Action*, in *The Works of Theodore Roosevelt*, national edition, vol.11 (New York, 1926). 同書は一八九九年の著書がローズヴェルトの死後に全集の一冊として再版されたものである。
(17) Ibid., p.14.
(18) Murat Halstead, *The History of American Expansion and the Story of Our New Possessions, the Spanish-American War and the Heroes of '98, Seven Great Books in One Superb Volume* (New York, 1898), p.426; Richard Harding Davis, *The Cuban and Porto Rican Campaigns* (New York, 1898), p.172.
(19) Theodore Roosevelt, "Brotherhood and the Heroic Virtues," Sep. 5, 1901, in *The Strenuous Life*, pp.254, 256.
(20) *Philadelphia Record*, cited in *The Literary Digest*, Sep. 17, 1898, p.336.
(21) 以下を参照。Martin J. Sklar, *The Corporate Reconstruction of American Capitalism, 1890-1916: The Market, the Law, and Politics* (Cambridge, 1988).
(22) Rotundo, *American Manhood*, chap.11, esp. pp.248-250; Bederman, *Manliness and Civilization*, pp.12-13; Filene, *Him/Her/Self*, pp.72-74.
(23) Terry Mulcaire, "Progressive Visions of War in *The Red Badge of Courage* and *The Principle of Scientific Management*," in *American Quarterly*, vol.43(Mar. 1991); Robert H. Wiebe, *Self-Rule: A Cultural History of American Democracy* (Chicago, 1995), pp.155-158; Alan Trachtenberg, *The Incorporation of America: Culture and Society in the Gilded Age* (New York, 1982), p.58; Richard Slotkin, *Gunfighter Nation: The Myth of the Frontier in Twentieth-Century America* (New York, 1992), chap.3.
(24) George Nestler Tricoche, "Compulsory Services in the United States," in *The Yale Review*, vol.5 (Oct. 1915). 引用は pp.93-94 より。
(25) William James, "The Moral Equivalent of War," in *The Popular Science Monthly*, vol.77 (Oct. 1910). 引用は pp.400, 407 より。
(26) 「はじめに」注（1）参照。ローズヴェルト自身、政治家としては企業合同と連邦政府の強化による規制を通じて法人資本主義体制を推し進めるというビジョンを持っていた。Theodore Roosevelt, *The New Nationalism* (New York, 1910); Sklar, *The Corporate Reconstruction*, pp.334-363.

三　新しい男らしさと人種

米西戦争とフィリピン戦争は、その言説において、新しい男らしさの正当性を強める契機となった。そこでは、白人男性の「熱情的な男らしさ」が他人種の男性の男らしさの欠如を執拗に描き出すことによって確認されていった。

ジョージ・モッセによれば、近代の男性理想像は、社会の中で周縁化された人々のステレオタイプを「対比として自身を定義するイメージ」、すなわちカウンタータイプとして必要とする。西ヨーロッパにおいては、ユダヤ人やジプシー、狂人や常習的犯罪者、性的逸脱者などがそのカウンタータイプを供給するが、米西戦争においてはアフリカ系アメリカ人兵士とキューバ人反乱軍将兵がカウンタータイプとして持ち出されたのである。(1)

キューバ人が有色人種であるという認識は、必ずしも米西戦争突入以前のアメリカにおいて明確に存在していたとは言えなかった。(2) しかし実際に米軍がキューバに到着すると、米軍の将兵はキューバ人および反乱軍が非白人種であることを発見し、イメージは大きく転換する。(3) 作家としても著名な戦争特派員スティーヴン・クレインは以下のように書いている。「我々は、我が国の軍のこの地〔キューバ〕への上陸に対して喜びに満ちた熱狂が存在した、と想定してはならない。

アメリカ兵たちは、静かな好奇心をもってぼろを着た茶色の反乱者たちを見た。そして、反乱者たちは鈍感そうに、ほとんど無関心にアメリカ人たちを見たのである。[4]」

以後、米西戦争におけるキューバ人の記述は、キューバ反乱軍兵士たちの男らしさの欠如という形でなされていく。一方では、キューバ兵の臆病さと戦闘能力のなさというテーマが繰り返される。キューバ兵が危険に身をさらすことは、「熱情」の表れや勇敢さではなく鈍感さを示すものとして解釈された。クレインの記述は、アメリカ兵とキューバ兵の差異を創り出している。

> ひどく不格好な黒人のキューバ人が一人、心臓のすぐ下を打ち抜かれて倒れ血が彼の汚れたシャツにしみをつけた。彼には苦痛が無かったように見えた。まるで、彼は倒れる前から無感覚であったかのようであった。何ら叫び声もあげなかった。〔…〕すぐさま、一人のキューバ人がもう一人の背中に〔撃たれた男の〕体を背負わせ、死につつあるその男の足を持ち上げた。立去って行くその行進は、グロテスクな手押し車に似ていた。誰も大して気にも留めなかった。[5]

アメリカの白人兵士と黒人兵士の関係も、白人男性の男らしさを定義するために重要であった。この戦争には黒人正規部隊として組織されていた第十騎兵連隊もラフ・ライダーズと共に参加していた。ラフ・ライダーズを有名にしたサン・フアンの戦いでは、両者が共に戦闘に携わっていた。

世紀転換期のアメリカのナショナリズムは「人種の区分よりも徳性の質――すなわち、責務・自己犠牲・勇気という高尚な理念にかなうヒロイックな徳性の質」に基盤を置く、と指摘されることもある。[6] しかし、実際にアフリカ系アメリカ人兵士が米西戦争の語りの中に登場する時には、白人男性兵士のカウンタータイプとしての役割を負わされていたのである。

米西戦争に参加した関係者の証言に多く見られた言説は、黒人兵士は白人士官の下でなければその力を発揮できない、というものであった。ローズヴェルトは、先に述べたように、黒人兵士の戦いぶりを評価しつつも、以下のように付け加えた。

> 〔黒人兵士〕は、当然ながら、とりわけ彼らの〔部隊の〕白人士官たちに依存している。時折、彼らはまさに白人の最上の階級のようにイニシアチヴをとり、責任を負うことの出来る下士官を産むが、それは通常は期待できず、期待することが公正であるとも言えない。黒人部隊には常に士官が何人か必要である。一方白人正規部隊、そして我が「ラフ・ライダーズ」では、彼らの士官が殺されていようといまいと、ひとたび始めれば下士官が彼ら自身で戦闘を行うことが出来ることを、経験が示している。[7]

また、黒人正規部隊の活躍を描いた書に前文きを寄せたジョセフ・ホィーラー少将は記している。「南部の男たちは、かつての黒人奴隷

の顕著な特性は忠誠――その美しさと素朴さにおいて人の心に触れるような忠誠心であることを知っている。」ホィーラーは、この忠誠心が米西戦争でも発揮されたと主張しているのである。[8] また、ある軍医は米軍の黒人兵士について、「彼らが白人をそのリーダーに持つ限り」において「何が危険であるかを気にすることはない」であろうという雑誌記事の文章を引用している。[9]

リチャード・H・デイヴィスの伝えるサン・フアンの戦いの模様はより隠微な形で白人男性と黒人男性の男らしさの差異化を図っている。彼は途中で、負傷した三人の黒人兵士と共に本隊からはぐれて小川の側の木の下で腹部に重傷を負い横たわっている第一〇騎兵連隊のロバーツ中尉を発見する。スペイン兵がいつ襲ってくるかもしれぬ状態である。

若い中尉は、半裸で、自分自身の血に濡れ、枯れた小川の側に座り、三人の部下たちは三匹の忠実な番犬のように彼の足元にしゃがみこんでいた。彼らはそれぞれ赤色武勲章を身に着け、その黒い肌は憔悴して灰色のようになり、彼らの目は忍耐強く将校の白い唇をじっと見つめていた。私と一緒にいた白人兵士たちが「ロバーツ」を野戦救護所まで連れ戻すことを申し出ると、黒人たちはひどくそれに憤った。軍曹は「もし中尉が動けたならば、我々がずっと前に運んでいっていただろう」と言ったが、彼は自分の腕がだめになっていることを失念していた。「ああ、外科医たちを困らせるな」とロバーツは元気よさげに付言した。「彼らは忙しいに違いない。私は待てる」と。[10]

この記述においては、一見して黒人兵士と白人士官の間に負傷と自己犠牲とを共有する連帯が存在しているかのように見えるが、両者の間にはヒエラルキー的関係がある。黒人兵士の苦痛を耐える男らしさは白人士官ロバーツ中尉への忠誠という形で表されているが、ロバーツの男らしさはキューバに展開している米軍全体、ひいてはアメリカの利益のために苦痛を耐え、自己を犠牲にすることで表される。[11]

これらの記述には、白人は自分で独立した判断によって戦いうるが、黒人にはできない、とする図式が存在している。つまり、黒人と違って、白人にはヒエラルキーの上位に上り、自立・独立する潜在能力を持っているという主張である。しかし他方で重要なことは、独立した判断のできる白人といっても、あくまでも士官、混乱時という特殊な状態でも下士官までにしか言及していないのである。つまり白人男性間には流動的であれ厳然たるヒエラルキーが存在しているが、そこに絶対的にヒエラルキーの下に置かれるべき存在としての黒人男性兵士を設定することで、ヒエラルキーを自然なものとして記述している。アンテベラム期の白人労働者が自己を黒人奴隷と比較することで共和主義に反しかねない賃金労働の状態を受容可能なものとしたように、[12] 新たなヒエラルキーを肯定しようとする言説であると言える。

黒人兵士が白人兵士の男らしさのカウンタータイプとして表象される時には、黒人男性の劣等性を強調する他に、白人男性がその「熱情的な男らしさ」を発揮する場を提供するための存在としても利用され

た。これを最も劇的な形で表現したのが、サン・フアンの戦いの模様をその回顧録の中で描き出したセオドア・ローズヴェルトである。混戦の中で逃げ出そうとしているように見えた[13]黒人兵士を戦線にとどめるため、彼は

> 跳び上がり、数ヤード後方に向って歩き、リボルバーを取り出して撤退する兵士たちに止まるよう命じた。そして彼らに向って叫んだ。諸君の戦いにおける勇敢さを評価しており、諸君を傷つけるのは残念だが、しかし少しでも後方へ向うそぶりでも見せるならば、最初の者を撃たねばならない、と。[14]

ローズヴェルトによれば、「そこでわれらがカウボーイ、ハンター、鉱夫たちは厳かにうなずいて、まるでコミック・オペラのごとくに一斉に述べた。『彼は必ずやる、彼は必ずやるぞ！』と。」これによって、黒人兵たちはあわてて戦線に戻った、という。[15]

この劇的で暴力的な場面においては、ローズヴェルトはその記述の中で自分の暴力的なリーダーシップを二つの要素によって正当化している。それは威嚇の対象が黒人であるということ、もう一つは指揮下にある白人兵士たちの支持である。ローズヴェルトの記述においては、彼をはじめとする士官と兵卒たちの間のヒエラルキーは、逃げようとしている黒人兵士を設定することで安定化している（はやしたてているのが、その証である）。

もとよりローズヴェルトはこのような場面を作るために入念な準備をしていたと言ってもよい。第一義勇騎兵隊（ラフ・ライダーズ）を編成するに際して数多くの男たちが志願したが、ローズヴェルトは主に二つのグループを中心に採用した。一つはアイヴィー・リーグ出のエリートたち、もう一つは南西部すなわちテキサスやその他準州出身のカウボーイ、猟師や兵士たちである。ローズヴェルトによれば、彼らの出身地は「ごく最近に白人文明に獲得された土地であり、生活条件は未だフロンティアが存在していた頃フロンティアにおいて一般的であったような生活に限りなく近い土地」であり、彼らはその剛健さにおいて「素晴らしき男たちの一団」であった。[16]これによってラフ・ライダーズは「これ以上にアメリカの地の男たちを代表する集団は存在しない」、多様な要素からなりながらなお「効果的な戦闘マシーンに容易に鋳直された」部隊であり、しかも「ローズヴェルト大佐はライフルを取り、彼が応援を必要と思った空間を突っ切って部下たちを率い攻撃した。［…］ローズヴェルトのラフ・ライダーズは、名実ともにローズヴェルトのそれとして行くのである」との評判を得た。そしてジャーナリズムにおけるローズヴェルトのイメージも、男らしさの欠如した伊達男から頑健なラフ・ライダーへと変貌を遂げたのである。[17]

註

(1) Mosse, *The Image of Man*, chap.3. 引用はp.56より。同様に、歴史社会学者マイケル・キンメルの、アメリカ人が歴史的に男らしさを証明するにあたって男らしさに関する不安を他者に投影してきた、とする指摘を参照。Kimmel, *Manhood in America*, p.9, and passim.

(2) Michael H. Hunt, *Ideology and U.S. Foreign Policy* (New Haven, 1987), pp.59-61;

Linderman, *The Mirror of War*, pp.131-136.

(3) Linderman, *The Mirror of War*, pp.136-138; Alexander DeConde, *Ethnicity, Race, and American Foreign Policy: A History* (Boston, 1994), p.62.

(4) Stephen Crane, "Hunger Has Made Cubans Fatalists," Jun. 27, 1898, in *Reports of War, War Dispatches, Great Battles of the World* (Charlottesville, Va., 1971), p.147.

(5) Stephen Crane, "The Red Badge of Courage Was His Wig-Wag Flag," Jun. 22, 1898, in *Reports of War*, p.138.

(6) Pettegrew, "The Soldier's Faith," pp.66-67.

(7) Roosevelt, *The Rough Riders*, p.92. 同様の主張は、以下の書簡にも見られる。Roosevelt to Robert J. Fleming, May 21, 1900, in *The Letters of Theodore Roosevelt*, ed. by Elting E. Morison et al., 8 vols. (Cambridge, Mass., 1951-54), vol.2, p.1305.

(8) Joseph Wheeler, "Introduction," in Hershel V. Cashin et al., *Under Fire with the Tenth U.S. Cavalry* (New York, 1899, reprinted in 1969), pp.xiv-xv.

(9) W. Thornton Parker, "The Evolution of the Colored Soldier," in *North American Review*, vol. 168 (Feb. 1899), p.228.

(10) Davis, *The Cuban and Porto Rican Campaigns*, pp.209-211. 引用文はpp.210-211より。

(11) この分析はAmy Kaplan, "Black and Blue on San Juan Hill," in Kaplan and Donald E. Pease (ed.), *Cultures of United States Imperialism* (Durham, 1993), pp.233-235.を参照した。

(12) David R. Roediger, *The Wages of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class* (London, 1991), esp. chap.3.

(13) この現場を目撃したある黒人兵士は、この逃げようとしていると見えた兵士たちは単に自分の部隊の士官に命じられたためである、と主張している。*New York Age*, May 11, 1899, cited in Booker T. Washington et al, *A New Negro for A New Century* (Chicago, 1899, reprinted in 1969), pp.54-62.

(14) Roosevelt, *The Rough Riders*, p.93.

(15) Ibid., p.93.

(16) Ibid., pp. 8, 11.

(17) "With the Rough Riders at Las Guasimas," in *Harper's Weekly*, Jul. 30, 1898, pp.750-751; Mark Sullivan, *Our Times: the United States, 1900-1925*, vol.2: *America Finding Herself* (New York, 1927), chap.13.

四　男らしさ・人種主義・帝国主義
——フィリピン戦争

フィリピン人の場合は、支援の対象であったキューバ人反乱軍兵士や同じ国旗のもとで戦うアフリカ系アメリカ人兵士とは違って、アメリカ軍と交戦する敵となったため、キューバ人やアフリカ系よりも容易に白人男性のカウンタータイプにされた。

フィリピンに進駐した米軍の将兵は、当初からフィリピンの原住民を「ニガー」と呼び軽蔑した。すなわち、フィリピン人を黒人と同じであると認識したのである。白人兵士や将校たちはフィリピン人とアフリカ系アメリカ人を人種的にほぼ同一視したため、フィリピンに派遣された米軍の黒人兵士がフィリピンの反乱軍に共感を覚えているのではないか、と疑う者も少なからず存在した。あるいはインディアンと同様の野蛮人として認識されることも多かった。実際フィリピンに派遣された米軍の軍人の多くは一九世紀後半の対インディアン戦争で名を馳せた者で構成されていた(1)。

フィリピン併合を正当化する際には、原住民の野蛮さと暴力性が仮定されていた。ウイリアム・マッキンレー大統領は一八九九年末の年次教書で、フィリピンを「放棄することはできない。もし我々が「フィ

リピン」を放棄するならば、我々は「フィリピン」をすぐさま無政府状態、最終的には野蛮へと放置することになる」と主張した。また、ローズヴェルトはマッキンレー暗殺後に大統領に就任して最初の年次教書である一九〇〇年末の年次教書においてこう言明した。「「フィリピン」諸島をこの時期に放置することは、残忍な無政府状態の混乱の中に「フィリピン」が陥ることを意味するのである。(2)」

フィリピン併合・植民地化政策と男らしさとは相互に関係し合っていた。まず、男らしさへの渇望がフィリピンの併合と反乱軍との戦争を正当化した。植民地支配は、アメリカ人男性がその男らしさを発揮すべき格好の場として提示されたのである。

膨張主義派ジャーナリストのハルステッドはイギリス帝国の例を引きつつこう述べている。フィリピンはアメリカの若者にとってはイギリスにとってのインドのように、「男らしさを喚起し準備しその幅を広げ、我々に地球上の隅々までを歩き尽くしてすべての人々に我らが福音を教えるという新しい使命を与えてくれる、冒険・進取の試み・至上の幸福の約束の地なのである。」同様に、帝国主義者として知られる上院議員アルバート・ビヴァリッジはその演説の中で述べた。彼によれば、フィリピンにアメリカが進出し植民地化することは、「この共和国のすべての栄光ある若い男性にとっての機会を意味する――世界がかつて目にしたなかで最も雄々しく、野心的で、辛抱できない、そして戦闘的な男性にとっての、である。」あるいは、当時プリンストン大学の政治学教授として有名だったウッドロー・ウィルソンは一八九九年のスピーチで愛国主義の問題を論じながらこう述べた。一八九〇年のセンサスによればもはやフロンティア・ラインを引くことはかなわなくなった。その意味するところは、

この国の広大な領域のすべてが現代の文明化の影響力のもとに入れられてきた、ということである。フロンティアの時代には、愛国主義の責務は単純で明白であった。それは主に筋肉と勇気の問題であった。国の必要とするものは、フロンティア・ラインに沿って突き進み、その先の粗野な矯められざる自然の諸力を征服することであった。

議論は、同時代のアメリカが直面している問題であるフィリピン植民地化に広がってゆく。彼によれば、「無意味な不平小言ほど、筋肉を弛緩させるものはない。これはフィリピン問題に適用しうる」。そして彼は述べた。

第一に、フィリピンの征服とは何を意味するのであろうか？それは、この国が、自身の人生を我らが東部の都市の衣料品店のカウンターの後ろで費やすよりもフィリピンの溝の中に死ぬことを選ぶ若い男たちを持つ、ということなのである。私は、自身そちらを選ぶべきだと思う。フィリピンは我が国の熱烈で熱い血に溢れる若い男たちに、自分たちの力に応じて国に奉仕する機会を提供しているのである。

こうした言説が「熱情的な男らしさ」の発露の場としての新たなフロンティア、そしてそれを供給してくれる帝国を想定していることは明白である。ジョージ・デューイ提督のマニラ湾における勝利を祝う宴席で、ホームズ判事は述べた。

> 歴史上常に男の人生観の背景に存在していた、戦闘で死に直面せざるをえない可能性は、今日我々が男に関して最も評価するものに形と色彩を与える。イングランドの男たちは、その国境のいずこかで常に遂行している小戦闘によって高尚でヒロイックな人生の過ごしかたをするよう奮起させられ、力づけられている。(3)

他方で、フィリピンにおける戦争は「熱情的な男らしさ」の発揮を正当化する機会という側面を持っていた。まず、アメリカ白人男性の「熱情的」だが文明的な男らしさと、フィリピン反乱軍兵士とが対置されて語られる。米西戦争終結直後に陸軍長官に就任したエリヒュー・ルートは、一八九九年の演説で以下のように述べた。

> 我々は平和的であり、軍事的な国民ではないが、我々は戦闘的な気質からできており、戦闘が厳然たる必要性によって仕事となるいかなる時でも、我々は常に偉大な好戦的人種の子供たちになることで戦闘を行うのである。

この「熱情的男らしさ」の使い分けの規範こそが文明であり、これを解しない者は野蛮人となる。

> 厳格な意志、自己抑制、そして命令と〔フィリピンの反乱軍による〕侮辱への怒りからすらも自己を抑える責務に服従する力は、アメリカの兵士たちに文明的で遵法的な人々の崇敬を受ける資格を与えた。しかし、それによって彼らが得たものは、半文明的な反対者たちの侮蔑のみであった。この侮辱と、それが生み出したアメリカ人は戦わない、臆病者である、海に追い払える、という確信こそが、フィリピン人の群れが我が軍に襲いかかってきた二月五日の攻撃に至らせたのである。彼らはすぐに過ちを学ぶことになった。

マッキンレーも「我々の親切と忍耐は臆病さの証と取られた」と、ルートの演説に類似した主張をその一八九九年の年次教書で展開している。(4)

このような「文明対野蛮」の言説は、野蛮人は力のみを理解する、と断定することで、文明的であることを放棄することなく、「熱情的な」暴力をふるうことを正当化した。

フィリピン人が野蛮人として描き出されると、次には野蛮人と文明人の間には暴力による闘争とそれを通じた野蛮の根絶という道しかありえない、という主張が展開される。ローズヴェルトは、そうした言説を代表する存在であった。彼によれば、「平和は戦争を通じてのみもたらされる」のであった。彼はアギナルドの反乱軍を非難した後にこう論じた。

しかしながら諸国民の間の平和さの成長は文明化された諸国民に厳格に限定されてきた。〔…〕野蛮な国民との間では平和は例外的状態である。文明と野蛮の境界上では、野蛮の状況下にあるが故に、戦争は一般的には常態である。〔…〕長期的には、文明人は野蛮な隣人を征服することによってのみ平和を維持できることがわかる。何故なら野蛮人は、極めて例外的であるが故に無視されうるような事例を除けば、力にのみ屈服するからである。(5)

このローズヴェルトの主張は、多くのフィリピンに侵入した米軍の将兵たちによっても共有されるところであった。彼らの主張は、アジア人は力のみを理解できる、というものであり、米軍が各地で引き起こした原住民虐殺行為も、こうした認識が背景になって発生したものであった。(6)

さらにこうした原住民に対する残虐な行為も、野蛮な環境の中に置かれた白人男性、という点から正当化させようとする主張も存在した。大統領ローズヴェルトは一九〇三年にノース・ダコタでの演説でこう弁明した。アメリカ軍の兵士たちは、

熱帯の密林の中で、我らが男たちのみでなく多くの友好的な原住民、我々の統治を熱心に歓迎する最も平和的で文明化された人々に対しても極めて不実で残虐な敵と戦っていたのである。そのような環境下では、地球の反対側で小さな分遣隊に勤務する十万の熱血的な力強い若い男たちの間で、時折の過ちも起こらないというのは不可能である。(7)

彼は米軍の残虐行為をよしとするわけではなかったが、野蛮に囲まれては文明的なアメリカ人兵士もときに野蛮な行為に走ることはある、という図式によって、むしろ原因をフィリピン人の側に求めているのである。

保護国や植民地の非白人を「野蛮」と見なし、「熱情的な男らしさ」の発揮の対象とする試みは、労働者階級の白人男性にも影響を及ぼした。いわゆる労働者共和主義的な愛国主義と組合からの非白人労働者の排除によって男らしさを構築してきた労働組合は、米西戦争・フィリピン併合に至る帝国主義的政策に対してこれを受容するようになっていったのである。(8)

更に、軍隊的ヒエラルキーと管理を社会のモデルとする図式の流布は、米西戦争の軍事的リーダーたちが政治のリーダーとしてもふさわしいと認識され、政界に多くの指揮官たちが進出することを可能にしたことからも伺うことができると言えるだろう。(9)

註

(1) Stuart Creighton Miller, *"Benevolent Assimilation": The American Conquest of the Philippines, 1899-1903* (New Haven, 1982), passim, esp. p.58; Gatewood, *Black Americans and the White Man's Burden*, p.280; Walter L. Williams, "United States Indian Policy and the Debate over Philippine Annexation: Implications for the Origins of American Imperialism," in *The Journal of American History*, vol. 66 (Mar. 1980).

(2) William McKinley, annual message, Dec. 5, 1899, in James D. Richardson (ed.), *A Compilation of the Messages and Papers of the Presidents, 1789-1905*, vol. 10 (New York, 1906), p.172; Theodore Roosevelt, annual message, Dec. 5, 1900, in ibid., p.437.

(3) Halstead, *The History of American Expansion*, p.638; Albert J. Beveridge, "Albert J. Beveridge's Salute to Imperialism, 1900," in Thomas G. Paterson (ed.), *Major Problems in American Foreign Policy*, third edition, vol.1 (Lexington, 1989), p.391; Woodrow Wilson, "A Report of a Speech on Patriotism in Waterbury, Connecticut," Dec. 14, 1899, in Arthur S. Link (ed.), *The Papers of Woodrow Wilson*, vol.11 (Princeton, 1971), pp.298-299; Holmes, "Admiral Dewey," Oct. 14, 1899, in *The Occasional Speeches*, p.110. また、Hoganson, *Fighting for American Manhood*, chap.6.

(4) Elihu Root, "The American Soldier," pp.3, 6; McKinley, annual message, Dec. 5, 1899, in *A Compilation*, p.168. しかし、実はマニラの米軍がフィリピン反乱軍を挑発したという方が、戦闘にいたる背景の実態に即していたと言える。Miller, *"Benevolent Assimilation"*, chap.4.

(5) Theodore Roosevelt, "Expansion and Peace," in *The Independent*, Dec. 21, 1899, in *The Strenuous Life*, pp.28, 30-31.

(6) Miller, *"Benevolent Assimilation"*, passim.

(7) Theodore Roosevelt, at Fargo, North Dakota, Apr. 7, 1903, in Henry Cabot Lodge (ed.), *Addresses and Presidential Messages of Theodore Roosevelt, 1902-1904* (New York, 1904), p.156.

(8) Andrew Neather, "Labor Republicanism, Race, and Popular Patriotism in the Era of Empire, 1890-1914," in John Bodnar (ed.), *Bonds of Affection: Americans Define Their Patriotism* (Princeton, 1996).

(9) Kristin L. Hoganson, *Fighting for American Manhood*, chap.5.

五　新しい男らしさの批判者たち

当然ながら、ローズヴェルトが代表するような「熱情的な男らしさ」と帝国主義の結合という世紀転換期の言説を誰もが支持していたというわけではない。一方には、一九世紀的な自己抑制と独立性を男らしさの原則とする人々が、他方には「熱情」と帝国主義的対外戦争の結びつきを切断しようとする人々がいた。ここでは、前者の例として作家・社会活動家のアーネスト・クロスビーを、後者の例として改革活動家のジェーン・アダムズを取り上げる。

(一)　英雄ジンクス大尉――軍事的男らしさへの批判

アーネスト・ハワード・クロスビーは一八五六年、ニューヨーク市の富裕な牧師・改革者の家に生まれた（一九〇七年没）。ニューヨーク大学、コロンビア・ロー・スクールを卒業、弁護士、ニューヨーク州議員、エジプトでの国際裁判所判事を務め、国内でも詩人・社会改革者として活動した。後にトルストイの影響を受けた平和主義者となり、米西戦争およびフィリピン戦争に対しては強く反対の姿勢をとった[1]。

彼が二つの戦争を批判する目的で一九〇二年に著した風刺小説が、本節で扱う『英雄ジンクス大尉[2]』である。本書はフィクションであるが、内容はローズヴェルトのラフ・ライダーズ、フレデリック・ファンストン将軍によるアギナルド逮捕作戦[3]、フィリピン人に対する残虐行為の数々、義和団の乱の鎮圧などの同時代の実際の事件を明らかに

取り入れた痛烈な帝国主義批判であり、帝国主義を支える「熱情的な男らしさ」を意識的に風刺した作品である。

『ジンクス大尉』は一八九八年から一九〇二年までに起こったアメリカの帝国主義的対外政策をパロディ化して盛り込んだ風刺小説であるが、一貫して批判の対象になっているのは、軍隊に象徴される、ヒエラルキーと服従が支配する非個人主義・非自立的な男らしさである。同書においては「熱情的な男らしさ」を具現する軍隊的な価値観が極めて批判的に描き出されているが、その批判の対象は軍隊のヒエラルキー性と暴力性に帰着する。

主人公サム・ジンクス少年は父親にもらった兵隊の人形のうちでも、剣を持ち、羽飾りのついた兜をかぶった士官の人形に特に魅力を覚える。イースト・ポイント（ウェスト・ポイントのもじり）では先輩のいじめを受け、過去の偉大な将軍たちも同じ体験をしたことに「キリスト教殉教者の恍惚を覚えた」。先輩の世話をさせられても、彼は「我々は、服従ということを学ばねばならないだろう？それが兵士の第一の責務だ。我々は従わなくてはならない。どのように、使用人になることによってよりもよく服従することを学べる？」と、不満を覚えることもない。キューバピン（キューバとフィリピンを意味する）では原住民のガルシアに自由・平等・兄弟愛を教えるが、それぞれ「ああ、自由…ええ…そう、命令されたようにする自由だ」「一般的には、我々は平等をもっている。しかし、それは人々が階級によって異なることを否定はしない。将軍がいて、彼は私の上官だ。私は中尉の上官で、我々はみな兵卒の上司だ。〔…〕我々は上官を見ることすら許されなかった。〔…〕」「イースト・ポイントでは、先輩に間違った類の兄弟愛を示したら、あごに一発食らうのだ」と、軍隊における絶対的服従という観点から説かれるのである。[4]

はたまた、ポースラニア（中国を意味する）でサムがトゥートン（ドイツのこと）軍とその皇帝に敬礼すると、皇帝はサムに話し掛けてくる。「将軍、君は〔領土〕拡張についてどう思うかね？」

「申し訳ありません、陛下」とサムは言った。「私は考えません。私は命令に従います」

皇帝は驚きと喜びの感嘆をもらした。

しかしその後、サムは知人の発明家から兵士の代わりに機械を使うというアイディアを聞かされる。「どうやって、勇敢な男たちの勇気なしに成功するのか？」とサムが尋ねると発明家は、「勇気！鋼鉄の一片以上に勇敢なものがありますか？鋼鉄を恐れさせるのは易しくはありません」「服従が欲しいですか？機械より従順なものがありますか？」と答え、サムを不快にする。[5]

服従と暴力のみで独立した精神を知らない「熱情的な男らしさ」が男らしくないことを批判するために、クロスビーはサムの恋人マリアンを登場させる。英雄として凱旋したサムは、婚約者マリアンに結婚の履行を迫られ、なし崩し的に結婚してしまう。これによってサムは女性の人気を失い、大統領への道を断たれ、転落していく。[6]

クロスビーの描く軍隊像は、命令と服従のヒエラルキーに対する厳

しい批判となって表れている。逆に言えば、クロスビーが擁護する男らしさの基準は、暴力への訴えを抑制すること、理性によって独立した思考をするという共和主義的な男らしさであることがわかる。

しかしながら、クロスビーの「熱情的な男らしさ」批判は、以下の二つの点で困難を余儀なくされる。一つは、彼の擁護する男らしさの基準であり、もう一つは男らしさと人種の関係である。

クロスビーが価値を置いている男らしさが一九世紀的な経済的活動を通じた独立と理性とであることは、サムの嫌うものから推測できる。農家の息子であるサム少年は、おもちゃの兵隊を与えられると家の家畜には目もくれないようになる。そして彼が大尉として軍務に就くための道中で、戦争に関心なく農作業にいそしむ農民への軽蔑心を露わにする。「兵士こそが真の男であり、創造物の中の唯一の完全なる産物なのだ」とサムは考えるのである。[7] しかし、一九世紀末には全国及び国際農産物市場の変動に翻弄され、金融資本に従属していく農民が、独立心のシンボルとなり得るかどうかは疑わしい。[8] つまり一九世紀的な自己抑制と経済的独立による個人主義的市民像が男らしさの基準としての魅力を失いつつある、という点は解消されないのである。

さらに、サムと非白人の関係が表れる場面になると、軍隊における「熱情的な男らしさ」への批判との間に緊張が生じる。確かにクロスビーは怒りにまかせてキューバピンの原住民の村を焼き払ったり、ポーススラニアの寺院を破壊略奪したりというような、米軍のフィリピンにおける残虐行為を思わせるような暴力を批判的に描いている。[9] しかし、以下に紹介するような場面で、人種と男らしさの関係が問題とされる。

キューバピン北部のモリト族に懲罰を加えるためにサムたちの白人義勇連隊とジェイムズ大佐の率いる黒人連隊の二連隊が派遣された。サムがジェイムズに「貴方はダーキーたちを兵士としてどう思いますか？」と尋ねると、ジェイムズは黒人兵の方が白人兵よりも優秀だと答え、理由を説明した。

> 彼らを貴方の望むいかなる種類の情熱にでも至らせることができます。そして彼らは規律に対してより従順です。彼らは命令され、蹴られ、殴られるのに慣れており、そして気にしません。加えて、彼らはその低い社会的地位故に上の者に従属するのに慣れており、むしろそれを期待します。彼らはまた皆貧困で、貧弱な食事とぼろの服と快適さの欠如とに慣れており、我々から受ける何事にも不平をもらしません。

サムの友人で戦争特派員のクリーリーが「貴方の言いたいことは、社会のものさしにおいて低い男ほど、彼はよき兵士になるということですね」と言うと、ジェイムズは同意した。[10]

サムや軍隊に「熱情的男らしさ」を求める人々が期待するのは、クリーリーの述べたことの逆であろう。しかしそうした価値観をクロスビーがこのような記述によって批判する時、男らしさと人種の関係は、結局非白人をカウンタータイプとして利用することで表されてし

まう。この場合クレインの描くキューバ兵の如く、鈍感であるが故に黒人男性は従順であり、それが兵士の資質としてふさわしい、と述べることで、クロスビーの語りは再び黒人男性の男らしさを否定してしまう。しかもこの場面では、黒人であることを貧困であることと直結させて語るに際して、下層階級に対する蔑視をも露呈しているのである。

この関係は、サムたちが夜道でモリト族に捕まって村まで連行されるというこの小説中で最も喜劇的な場面の一つにおいて、より明らかになる。族長カルロスはサムとの会話の中で、モリト族には狂人もいず、監獄も存在せず、同族の中で盗みや殺人をせず、一日に十二時間も働いたりせず、また自殺もない、と語る。一見するといわゆる高貴な野蛮人像であるが、その直後に「我らが部族の掟では、戦争捕虜は殺さねばならない」と述べ、その暴力性が再確認される。もっとも、サムたちも捕虜をとらなかったので、サムたちとモリト族の野蛮性は大して変らないが[11]。

この窮地を脱することができたのは、クリーリーがモリト族が仲間を判別する際の基準に目をつけたためであった。真のモリト族の特徴は若者が折檻によって認められること、首領はその頭に羽飾りをつけていること、刺青があること、太鼓を使うことの四つであった。一つ目はイースト・ポイントでのいじめの写真を見せることで、二つ目はパレードの軍楽隊の羽飾りの写真を見せることで、三つ目はキューバピンに向かう船上でサムが彫った刺青を見せることで、四つ目は軍楽隊の写真の太鼓を見せることで、カルロスは喜んで、「君たちは我々よりも偉大な野蛮人だ！」と叫び、サムたちを囲んで饗宴が催されたのである[12]。

この場面は、サムたちが野蛮人に等しいことを風刺しているが、逆に言えばサムに象徴される軍隊を理想化する男らしさを批判するのに、非白人の原住民の野蛮性を引き合いに出すことで原住民（フィリピン人をモデルにしている）をカウンタータイプ化している。しかも、クリーリーの機知によってモリト族を欺いたことで、非白人の原住民が白人に比べて愚かであることが暗に示され、サムたち白人男性の野蛮な「熱情的男らしさ」は本当の「野蛮人」と本質的に同一化されることを究極的には免れるのである。

このように、白人男性対非白人男性という人種とジェンダーの結び付いたステレオタイプが維持されているため、クロスビーの語りにおいては非白人種との対比において構築される「熱情的な男らしさ」は完全には否定されないのである。

（二）文明・野蛮・男らしさのオルタナティヴ

クロスビーの主張が一九世紀のミドルクラス的な男らしさを支持する言説であるのに対し、ジェーン・アダムズの平和論は平和主義と女性参政権要求運動を結合したものであり、ジェンダーと戦争の関係を浮き彫りにする典型的言説である[13]。

彼女は米西戦争とそれによって引き起こされた好戦的空気に懸念を覚えていた。シカゴでは「小さな子供たちが通りで日々戦争ごっこをして遊んでいた。もっとも、子供たちはキューバを解放する遊びでは

なく、逆にスペイン人を殺す遊びをしていたのであるが。[14]」その後フィリピン戦争への反対などを通じて、平和論に真剣に取り組むようになった。[15]その結果として書かれたのが、一九〇七年の『平和の新しい理想』[16]である。

アダムズは「熱情的な男らしさ」それ自体は否定しない。ただその熱情が発揮されるチャンネルから戦争を除外すべきであると主張したのである。「我々は戦争と破壊に結び付けられたヒロイズムを日々気にするよりも、確実に労働と人間の生命を養うことに属するヒロイズムを崇敬するのである。新しいヒロイズムは、現在の契機においては、貧困と病とを根絶するという普遍的な決意において表明されるのであり、この表明は国際的と呼ばれてよいほど広汎なものである。」故に戦争に向かう精神に代わるものは、「雄々しき善意」であると彼女は述べている。[17]ここにおいて、アダムズは「熱情的な男らしさ」と戦争や帝国主義的政策との結び付きは必然ではない、と論じているのである。

熱情を戦争以外の活動、具体的には慈善・改革運動に転化させるのは、アダムズの図式の中では野蛮から文明への進歩によってであった。

> 戦いへの欲望〔…〕は、未だ矯められざる血の者たちが住んでいる地域において、あるいは自己を優越した人種であると考えるが故に自分たちを通常の道徳的制約から自由であると想像するような者たちの間では、依然として力を振るっている。しかし、その領域は確実に小さくなっており、その表明も慎まれている。疑いようもなく、戦争は半野蛮の諸部族の間では何世代にも渡って存在するであろうし、また抑制なき商業精神によって喚起され支配されうる諸国民の間でも勃発するだろう。しかしそれが通常の人間関係への欲求に伝達されるにつれ、通常の人間の生活は戦争なしに進むであろう。[18]

アダムズは『平和の新しい理念』において、平和論と同時に女性の参政権論をも展開している。[19]当時の彼女はまだ市政レベルでの参加に絞った議論を展開しているが、この議論は女性の活動の拡大における「文明と野蛮」の構図とジェンダーの連関に立脚している。彼女によれば、初期の都市当局においては、声は「当然軍事体制にとって価値のある者にのみ与えられた」、という。

> 都市の存在と安定性が男性たちの防衛に依存している時、そして選挙人の究極的価値がその軍事的責務を遂行する能力に還元される時には、参政権が成人男性にのみ与えられるのにはある種の論理が存在した。〔…〕しかし、対立する諸都市はずいぶん前からその主張を武力によって決着づけるのをやめており、思うに、我々は、たとえ結局は連邦政府にとっての基盤としては真実かもしれないにせよ、選挙人のこの初期の資格審査は、近代都市には不適切であることを認めざるをえなくなるであろう。[20]

すなわち、社会が野蛮から文明に向けて進歩するほど、女性が政体に参加する資格を得られるようになるはずである、とアダムズは主張している。このような主張を構築する背景には、米西戦争を経て、市民としての美徳の軍事的側面を強調する傾向が見られるようになったことへの批判としての側面は無視できないであろう。[21]

彼女は、政体への参加資格における軍事的側面が後退すると、女性がその伝統的役割の知識を政体において発揮することができるようになることを強調した。「都市とは、多くの点において巨大なビジネスの法人であるが、他の側面においては都市は拡大されたハウスキーピングである」。そして「都市におけるハウスキーパーである女性が多様な形態をもつは、一部には伝統的なハウスキーピングが失敗してきたのは、諸活動に関して助言を求められてこなかったから」ではないか、と彼女は議論を展開する。[22]

このように、有徳の女性は家庭にいて家族の世話をし家庭を維持することが責務である、とする一九世紀の中産階級的ジェンダー規範を奪用・拡大解釈し、女性の社会活動を正当化する言説に転換するのは、当時の中産階級女性の活動家たちの典型的戦略の一つであった。[23]

アダムズの議論は、「熱情的な男らしさ」を許容しつつ、これと戦争や暴力との結合に対するオルタナティヴを提示するものであった。革新主義的な改革政治の背景に「男性性への衝動」が存在し、[24]男らしさを改革への活動に結び付ける傾向が存在したことが指摘されていることに照らして考えれば、アダムズの議論は積極的で有効なオルタナティヴであったと言うことができるだろう。

ただし、アダムズの議論には限界も存在した。彼女の図式においては、野蛮＝戦争＝男性中心、文明＝平和＝男女同権参加、という枠組みが存在するが、彼女は一貫して一社会の通時的な移行の観点で論じている。しかし、ローズヴェルトらの主張は、世紀転換期の世界を文明と野蛮に分類するという、言わばグローバルで共時的な世界観である。ローズヴェルト自身、先述のように文明的と分類された社会「内」では暴力への訴えは不必要になると認めている。だからこそ、帝国主義者たちは文明社会「外」にフィリピンを設定し、そこで「熱情的な男らしさ」を振るうべしと正当化を図ったのである。アダムズ自身が、野蛮な世界では戦争は不可避であると認めていることから、彼女の言説は、野蛮人への暴力を不可避とし、そこに男性の独壇場を見出そうとする帝国主義の言説を前提から批判しきれたものであったとは言い難い。

逆に言えば、文明の外が、「熱情的な男らしさ」を発揮し、正当な男らしさとして確立するために求められたとも言える。世紀転換期に帝国主義を唱導した著名な雑誌『アトランティック・マンスリー』は、米西戦争での華々しい勝利を祝い、以下のように論じている。アングロ・サクソン人種は「数千年に渡って、世界の冒険とアウトドアの仕事をなしてきた。」「イギリス人は、探検家であり、植民者であり、大陸の征服者であり、諸邦の設立者であった。」つまり男らしさと対外膨張主義政策と人種主義を連関させて主張する。これまでのアメリカは、

社会改革の時代、女性の「解放」なるものの時代、子供たちの全国組織の時代、些細な悪徳の抑止と些細な美徳の奨励の時代、系図学の研究の時代、病的なフィクションの時代、「淑女」のための雑誌と幼児のための文学の時代、我らが生活においてもメロドラマをもっていたがゆえに舞台におけるメロドラマの時代であり、そして思考と行動より批判と改革の時代であった。これらのものは皆、冒険に溢れる機会の欠如と、そしてかつて我々が享受する機会のなかったインドア生活を意味しているのである。(25)

こうした言説は、国内＝非男性的、国外への帝国主義的進出＝男性的、とする主張であり、ローズヴェルトやその他の帝国主義者が主張する、野蛮との戦いと男らしさを結び付けた言説と一致している。アダムズら女性活動家が国家や都市自治体と家庭のアナロジーを構築することで社会進出を正当化したとき、帝国主義者たちはアメリカ国外の野蛮の地の征服を男性の家庭外の仕事とのアナロジーを構築することで正当化したのである。

こうした言説は、アメリカの内と外を認識上分離することを可能にした。ローズヴェルトが一九一二年に革新党から大統領候補として出馬する際、アダムズは逡巡しつつも革新党の女性参政権や福祉立法支持の綱領に期待し、ローズヴェルトの軍国主義と妥協して同党に支持を与えたのである。逆に言えば、ローズヴェルトは、「熱情的な男らしさ」を特に帝国主義的に発揮することで、女性参政権や福祉立法に妥協できたとも言える。(26)

換言すれば、帝国主義と男らしさの結合は、従来の男らしさの価値観が内部及び女性の活動の両面から揺らいだ局面における、男性の側からの積極的な男らしさの再構築の言説であった。

註

(1) クロスビーについては、以下を参照。Perry E. Gianakos, "Ernest Howard Crosby: A Forgotten Tolstoyan Antimilitarist and Anti-imperialist," in Charles Chatfield (ed.), *Peace Movements in America* (New York, 1973).

(2) Ernest Howard Crosby, *Captain Jinks, Hero* (New York, 1902, reprinted in 1968).

(3) Miller, "*Benevolent Assimilation*", pp.167-170.

(4) Crosby, *Captain Jinks, Hero*, pp.7, 27, 43, 164-165.

(5) Ibid., pp.323-324, 339-341.

(6) Ibid., chap.15.

(7) Ibid., pp.10, 94-95.

(8) たとえば、Robert Klepper, *The Economic Bases for Agrarian Protest Movement in the United States, 1870-1900* (New York, 1978).

(9) Crosby, *Captain Jinks, Hero*, pp.181, 288-293.

(10) Ibid., pp.190-191.

(11) Ibid., pp.199-202.

(12) Ibid., pp.206-212.

(13) アダムズと平和運動については以下を参照。Sondra Herman, *Eleven Against War: Studies in American Internationalist Thought, 1898-1921* (Stanford, 1969), chap.5; Allen F. Davis, *American Heroine: The Life and Legend of Jane Addams* (Oxford, 1973), pp.135-149; Michael A. Lutzker, "Jane Addams: Peacetime Heroine, Wartime Heretics," in Charles DeBenedetti (ed.), *Peace Heroes in Twentieth-Century America* (Bloomington, 1986); 杉森長子『アメリカの女性平和運動史、一八八九年～一九二一年』ドメス出版、一九九六年、第五章。

(14) Jane Addams, "A Function of the Social Settlement," in *Annals of the American*

Academy of Political and Social Science, vol. 13 (Jun. 1899), p.343.

(15) Davis, *American Heroine*, pp.140-145.

(16) Jane Addams, *Newer Ideals of Peace* (New York, 1907).

(17) Ibid., pp.24, 26.

(18) Ibid., pp.229-230.

(19) 米西戦争、フィリピン戦争で外交問題への関心を喚起されたサフラジストたちは、ここに紹介したアダムズと類似した議論を展開している。Judith Papachristou, "American Women and Foreign Policy, 1898-1905: Exploring Gender in Diplomatic History," in *Diplomatic History*, vol. 14 (Fall 1990).

(20) Addams, *Newer Ideals of Peace*, p.181.

(21) Hoganson, *Fighting for American Manhood*, chap.5.

(22) Addams, *Newer Ideals of Peace*, pp.182-183.

(23) Aileen S. Kraditor, *The Ideas of the Woman Suffrage Movement* (New York, 1965, reprinted in 1981); Paula Baker, "The Domestication of Politics: Women and American Political Society, 1780-1920," in *The American Historical Review*, vol. 89 (Jun. 1984); Seth Koven and Sonya Michel, "Womanly Duties: Maternalist Politics and the Origins of Welfare States in France, Germany, Britain, and the United States, 1880-1920," in *American Historical Review*, vol. 95 (Oct. 1990); Suzanne Lebsock, "Women and American Politics, 1880-1920," in Louise A. Tilly and Patricia Gurin (ed.), *Women, Politics, and Change* (New York, 1990). 一見男女の役割を男性は公（政治・経済）、女性は私（家庭・教会）と分かつ分離領域 separate spheres イデオロギーであるが、このイデオロギー自体が実は不断に読み替えられ、闘争の対象となる一つの言説であることは重要である。Linda K. Kerber, "Separate Spheres, Female Worlds, Women's Place: the Rhetoric of Women's History," in *The Journal of American History*, vol.75 (Jun. 1988).

(24) J. R. McGovern, "David Graham Philips and the Virility Impulse of Progressives," in *New England Quarterly*, vol. 39 (1966); Joe L. Dubbert, "Progressivism and the Masculinity Crisis," in Pleck and Pleck, *The American Man*.

(25) "The War with Spain, and After," in *The Atlantic Monthly*, vol. 81 (Jun. 1898). 引用は pp.725-726 より。

(26) Davis, *American Heroine*, pp.188-194. ローズヴェルトの側については、拙稿「『男らしさ』の再編成――セオドア・ローズヴェルトと『男らしさ』の変容」『北大史学』第三九号、一九九九年、特に第四節を参照。

結論

以上見てきたように、アメリカ史における男性の「男らしさ」をめぐる言説の構築は、階級や人種、帝国主義的コンテクストなどの諸要素の中に位置づけることではじめて歴史的に理解することができるといえる。

世紀転換期における白人中産階級男性の男らしさと、それによる権力の正当性の証明は、「熱情的な男らしさ」を構築する言説を帝国主義的な文脈において非白人に投影し、彼らをカウンタータイプ化することで正当化を図った。逆に言えば、新しい「熱情的な男らしさ」の文化にとっては、帝国主義や非白人男性のステレオタイプは不可欠の要素としてその言説の内に取り込まれなければならなかったのである。